

卓 話

平成 23 年 2 月 8 日

『ガン患者となってみて生かされているありがたさ』

岐阜中ロータリークラブ 中根辰朗会員

ガン宣告に至る経過

平成 19 年 4 月に空腹後の胃の痛みを解消するために、長良の三輪クリニックへピロリ菌の検査に。この痛みは既に 1 年半前からのもので、食べると解消するという多くの人を経験するやつでした。当時は太り過ぎによる糖尿病予備軍で、食事管理をしながら体重減を試みている最中でした。痛みを和らげるためにどうしても食べ過ぎ気味で体重が増えてしまうという結果となり、この胃の痛みの原因を除去するために検査に行ったわけです。三輪先生からはピロリ菌検査より、より精度の高い内視鏡をすすめられました。1 週間後の結果は大学病院での再検査。4 月下旬に受けたところ、担当医より 5 月の連休中にもかかわらず、電話で直ちに病院に来るよう指示があった。お医者さんから患者の自宅に検査結果を聞きに来るようなという親切な電話があるということは、まさしく「ガン」宣告と察知できた。連休中ではあったが病院に向いたところ、「ガン」の告知を受け胃の全摘手術を宣告された。気持的には「ガン」イコール「死」への道筋は全くなく、「これは取ってしまえば何も問題なく、死なない」という安心感が先だった。そういう気持ちにさせられた理由は先生の明るさであった。胃の痛みを感じ始めて 1 年半後であった。安藤会員からはこういう痛みは「潰瘍性」なので早く検査を受けた方がいいよとアドバイスを受けておきながら、1 年半放置していた付けが「胃ガン」による「全摘」という結果でした。



全摘後の経過と現在の状況

手術後 12 日で退院には本人もびっくりでした。それからは食べるのが仕事となりましたが、この仕事はそれほど簡単ではなく、苦しみの連続。胃のある方には分からない苦しみです。通過不良による詰まりと戻し、加えて消化液の逆流。ダンピング症候群です。これにはさらに低血糖・低血圧からくるダルさと集中力の欠如、腸の無秩序な動きによる奇妙な痛み。それより、何よりも辛いのは食べられないということです。味覚が失われ何を食べてもおいしく感じず、限られた食べ物を極めて少量しか食べられないという、食べる楽しみが全く無くなったことが一番辛いということでした。それから現在丁度 3 年半が経過しました。今では味覚も多少は戻り、いろいろなものが食べられるようになり、食事の楽しさを味わえるようになりましたが、ダンピング症候群は元気に活動しており、もう少しつき合いを必要とするようです。

生かされている有難さ

ガン宣告を受け手術を受けたのが満 70 歳でした。悪い部分を取ってしまえば、また元の生活にすぐ戻れるだろうとかなり楽観的に手術を受けましたが、そうはいきませんでした。周りの人たちのサポートがなければ、とてもとても普通の生活は考えられない状態でした。70 歳にして初めて分かったのは、そのサポートの有難さでした。家族・友人の方々の温かい目をこの時ほど感じたことはありません。これまで一人で生きてきたという錯覚を思い知らされ、感謝・感謝の毎日を送っています。特に家内には頭が上がりません。周りの方々のおかげで生かされていることを実感しています。